暮らしの隙間

ハエトリグモが黒い点となって部屋の柱でジッとしている。挨拶しようと近寄ると、ヒュイッと飛んだ。すると驚いたことに、空中でキュッと向きを変えたのだ。「オーッ」と思わず声が出る。こんなことができるなんて！

クモ研究家ではないのであたりまえなのかどうかは知らないが、感動してしまった。普通に気に入っていたハエトリグモが、この日グッと僕に近付いた。

大きな瞳でハエを見つけると、ササッと音もなく忍び寄り、ヒタッと止まる。その繰り返しで悟られないよう間合いを詰めて行く。最後に狙いを定めジャンプ一発、襲いかかる。

獲物がいない時はほとんど動かない。ちょっとからかってやろうと、近くを指でトントンと打つと、人間お化けの出現に慌てふためき連続ジャンプ、闇雲に逃げてゆく。何とも愛嬌ある動きだが、必死に生きようとする姿がいじらしく、妙に切なくなったりする。

いやいやこれは人間が勝手に思うこと。クモにとっては迷惑千万。悪いことをしたと軽く謝るが、また見つけるとトントン。親愛の情を込めてだが伝わるはずもなく、また逃走ジャンプ。いつも片思いで終わる。

こんなことを書くと、よほどの暇人かバカかと思われそうだが、ならば人は日々何を見て過ごしているのだろう。

奇麗な満月とか、海の夕焼けとか、皆が共通して美しいとしているものだけではなく、自分一人の目。目的の目でもなく、その隙間にある目。意識はしなくとも誰しも見ているもの。日常を生きる傍らにある、そんな目こそたいせつではないだろうか。

子供の頃のように、自分にも世の中にも慣れさえしなければ、冴え冴えと目に映るものがそこかしこに現れてくれるかもしれない。

このところ近所を歩いて目に留まったもの。側溝を流れる銀色の水。微妙な影を織り成す盛り土。摩耗マンホールの幾何学的模様。石垣にひとつ際立つ石。垣根に塗られた剝げかけペンキのマティエール。倉庫鉄扉の絶妙な引っかき傷。空に線描する電線。生気を放つ立ち枯れた雑草。塀からのぞく名も知らぬ木の花。ぶきっちょに飛ぶ玉虫の閃光。動かない老犬が寝返りを打った。

こうやって、見慣れた、知っている、わかっていると流しているものが、極めて新鮮に入ってくるときがある。あの日のハエトリグモのように。だから僕の散歩は旅と同じだ。

たまに知らない裏道に入ってみる。感度は上がり、ますます旅の密度は増す。遠くに出かけずとも、そこにあるもの。暮らしの隙間で人は何を見ているのだろう。

（吉田　淳治・画家）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。